「男、突っ走る！」

第104回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（24）　『オフィスツリーイン』代表

船倉　篤志（24）　元名古屋芸術専門学校学生

住吉　真由美（42）　ダンス講師

山川　裕作（20）　ミュージカル出演者

北　まひる（22）　ミュージカル出演者

月島　藍那（22）　ミュージカル出演者

大森　泰明（58）　ミュージカル出演者

加原　美穂子（35）　ミュージカル出演者

加原　千世（13）　ミュージカル出演者

野倉　浩太（22）　元『スリジェネ』メンバー

山岡　智行（34）　映画プロデューサー

1居酒屋

雅也と裕作が飲んでいる。

雅也「え？　ミオと別れた？」

裕作「はい。まあ、四ヶ月近くは続いたんで」

雅也「ん？　四ヶ月ってことは、『神様が願うまで』の稽古が始まって、すぐ？」

裕作「そうっすね」

雅也「全然気づかなかったわ」

裕作「お互い、本番が終わるまでは黙っていようって話してましたから」

雅也「どっちから、告白したの？」

裕作「向こうです。一目ぼれだったみたいで」

雅也「へえ。一目ぼれだったのに、別れちゃったんだ」

裕作「嫉妬深いんですよ、あいつ」

雅也「意外だわ、ミオにそんな一面があるなんて」

裕作「ちょっと女友達とご飯行ったりするだけで、怒るんですよ」

雅也「高校と違って、大学は異性の友達がよ

り増える機会があるもんね。俺も専門学校入ってから、結構女の子の友達増えたから。高校生のミオには、まだそういうのが分かんないのかもしれないね」

裕作「でしょ。うっちーは、やっぱりそういうの分かりますよね」

雅也「俺は男女の友情はあるっていう考えだから、それこそ女の子の友達の家に泊めてもらったよ。もう一人男の子もいたし」

裕作「それでも、何もないですよね？」

雅也「あるわけないじゃん。お互い腹を割って話せる、良い友達なんだから」

裕作「ミオには、そういうのが理解できないみたいで」

雅也「ゆーさくは、これからどうするの？まあ大学はあるだろうけど、演劇活動とかはさ」

裕作「名古屋の劇団のオーディションを受けようかと思ってます」

雅也「本当？」

裕作「高校の時、演劇部やってたでしょ。しばらく演劇はやってませんでしたけど、今回『神様が願うまで』のメインキャストの一人をやらせてもらって、また演劇魂が目覚めたのかもしれません」

雅也「良いことじゃん。もし合格して、舞台に出演するようなことがあったら教えてね。必ず見に行くから」

裕作「はいッ」

笑顔で頷く雅也。

2　木内家・全景（数日後）

3　同・雅也の部屋

小さい段ボール箱を持った雅也が入ってくる――封を開けて、藍那の写真が映った名刺を取り出す。

雅也「良い感じじゃん」

と、スマホを開くと、名刺の写真を撮って、ＬＩＮＥを送る。

雅也の声「藍那、一週間前にデータ入稿した名刺、無事に届きました。今度渡すね」

4　ファミレス（夜）

雅也がパソコンで作業をしている――ドアが開き、藍那が来店してくる。

藍那「すいません、遅くなって」

雅也「お疲れ」

藍那「撮影が延びちゃって」

雅也「良いよ良いよ、俺もさっき来たばっかりだから」

と、ドリンクバーで注いだ抹茶ラテを飲む。

藍那「本当に抹茶好きなんですね？」

雅也「え？」

藍那「この間ここで打ち合わせしたときも、それずっと飲んでましたね」

雅也「そうだっけ？　全然気にしてなかったわ。（と笑うと）あ、そうそう。はい、これ名刺届きました」

と、ケースに入れた名刺の束を渡す。

藍那「ありがとうございます。これで、いろんな人に配れます」

雅也「俺は言う通りに作っただけだから。まさか、名刺をインスタ風のデザインにするなんて、俺にはとても思いつかなかったもん。藍那もクリエイティブな素質があるんじゃないかな」

藍那「うっちーさんこそ、私のためにここまで……ありがとうございます」

雅也「『神様が願うまで』で共演して知り合ったのも、何かの縁だよ。現にこうやって名刺だけじゃなくて、ホームページまでお願いしてくれてるんだもの。（とパソコンの画面を見せると）はい、まだ途中だけどこんな感じ」

藍那「おお、すごい」

雅也「ベースは作ったから、今日はこれをもとにいろいろ直していこうと思って」

藍那「はいッ」

×　　×　　×

雅也がパソコンを操作している――藍那、隣に座って一緒に相談をしている。

藍那「ギャラリーって、インスタをそのまま貼り付けることってできますか？」

雅也「できるよ、ちょっと待ってね。（と操作をすると）どう？」

藍那「すごい。良い感じですね」

雅也「確かにこれなら、いちいち更新しなくても、藍那が自分のアカウントからインスタ投稿すれば、こっちも勝手に反映されるから、ある意味便利だね」

藍那「やっぱりうっちーさんにお願いして良かったです」

雅也「（時計を見て）あれ、もう深夜十二時過ぎてるじゃん。そろそろ帰らなきゃね」

藍那「あの、今度ゆっくりご飯一緒に行きませんか？　いろいろしていただいてますし」

雅也「別に良いよ、そんなの。でも確かに、ゆっくりとご飯行きたいかもね」

藍那「（スケジュール帳を見て）二十四日とかどうですか？」
雅也「二十四日って、イブでしょ。藍那だって、クリスマス一緒に過ごす人ぐらいいるでしょうに。何もその日にしなくたって」
藍那「私はこの日、ずっと空いてますから」
雅也「そうなの？　（とスケジュール帳を見ると）ああ、夕方まで仕事の打ち合わせ入ってるから、十九時からなら大丈夫」
藍那「じゃあ十九時で。何食べます？」
雅也「何食べようかな。まあクリスマスイブだから、お肉でも食べようか。あ、肉バルのお店とかどう？」
藍那「良いですね」
雅也「適当にお店ピックアップしとく」
藍那「お願いします。あ、クリスマスなんで、私プレゼント用意しときますね」
雅也「ありがとう。俺も、用意しとく」

5　京都・マンション・篤志の部屋（朝）

朝食の支度をしながら、篤志がスマホをスピーカー状態にして話している。

篤志「は？　クリスマスプレゼント？」

6　木内家・雅也の部屋（朝）

スマホで話している雅也。

雅也「そうなの。女の子が喜ぶクリスマスプレゼントって、何が良いかなと思って」

7　京都・マンション・篤志の部屋

篤志「女の子って、あれか。ミュージカルでカップル役やった、あの腕組んでたモデルさんか？」

雅也の声「何でそこまで分かるの？」

篤志「他にいないだろうよ」

雅也の声「それでね、この間からずっとどうしようどうしようって考えるんだよ。ネットで調べたら、香水とかアクセサリーが良いって書いてあったけど、香水は好き嫌いとかあるだろうし、アクセサリーなんて重

たいって思われちゃう気がしてさ」

篤志「へえ、うっちーがちゃんと研究してるなんて。こりゃ、植野さんに報告だな」

8　木内家・雅也の部屋

雅也「やめてよ、そんなことしたら炎上するから。俺だって、女性にプレゼントなんてほとんどしたことないでしょ。それに、いくら普通の食事会って言っても、クリスマスイブになるとそれなりのプレゼントを用意してあげなきゃって思うじゃん」

篤志の声「なるほどなぁ」

雅也「だから、何が良いかなと思って……」

9　ホール・エントランス（数日後）

住吉たちダンサーの集合写真の告知ポスターが掲げられている。

10　同・ホール

観客席に座って見ている美穂子と千世

――少し離れた席で見ている雅也、まひる、泰明。
ステージで、住吉やその他のダンサーたちが踊っている。

11　同・エントランス

住吉たちキャストが見送りをしている
――雅也、まひる、泰明、美穂子、千世がやってくる。

千世「住吉先生ッ」
美穂子「お疲れさまでした」
住吉「ありがとう、来てくれて。（と雅也たちに）あら、うっちーさんもまひるちゃんもやっさんもありがとうございます」
泰明「すごいね、住吉先生」
まひる「感動しちゃいました」
雅也「もう素晴らしかったです」
住吉「ありがとうございます。『神様が願うまで』の稽古しながら、こっちもやってましたからね、いろいろ大変でした」

泰明「僕も一月から、住吉先生の教室で習い始めるので、ぜひよろしくお願いします」
住吉「ぜひ一緒に頑張りましょう」
まひる「じゃあ、私たちはこれで」
千世「またね、みんな」
と、手を振って去っていく雅也、まひる、泰明。

12　レストラン（夜）
雅也、まひる、泰明が夕飯を食べながら話している。
泰明「それにしてもすごかったね、住吉先生」
まひる「びっくりしました。一月から、住吉先生のダンスが学べるんだと思うと、楽しみになりました」
泰明「ああ、『スリジェネアカデミー』」
まひる「そうなんです。ダンスは住吉先生、歌はハルさんと洸さん、企画を考えるメディアっていう授業は国枝さん、演劇は国枝さんの知り合いの劇団の方が教えてくださ

るんです」
泰明「絶対楽しいだろうね」
まひる「うっちーは、アカデミーはやらないんですか？」
雅也「それなんだけど。俺、この間国枝さんに連絡して、『スリジェネ』の卒業を撤回して、アカデミーやることにした」
まひる「本当ですか？」
泰明「けど、一度は卒業を決めたのに、どうして？」
雅也「打ち上げの時、国枝さんがアカデミーの発表をしたじゃないですか。あの時、僕と一緒にいたりゅーたが、『うっちーもやらないの？』って言ったんです」
まひる「ああ、言ってましたね」
雅也「あの時のりゅーたの顔見たら、何だか親心というか兄弟心とでも言うんだろうか、アリサや翔もなんだけど、これからはこの子たちの成長を見守る側になりたいって思っちゃったんだよね」

まひる「良いと思います。良かった、うっちーも一緒で」
泰明「やっぱりうっちーは、『スリジェネ』のメンバーなんだよ」
雅也「（苦笑して）ですね」
まひる「年明けから、一緒に頑張りましょう」
雅也「うん」

13　街（数日後・夜）
クリスマスムード一色になっており、方々でイルミネーションやサンタ、ツリーなどの装飾がなされている。

14　肉バル店（夜）
雅也と藍那が食事をしている。
雅也「ここ美味しいね」
藍那「前から気になってたんです。良かったですね、ここにして」
雅也「本当だね」
藍那「あ、うっちーさん」

雅也「？」

藍那「（プレゼントを渡して）メリークリスマス」

雅也「ありがとう。俺も、メリークリスマス（とプレゼントを渡す）」

藍那「ありがとうございます」

雅也「開けて良い？」

藍那「もちろん。私も良いですか？」

雅也「うん」

お互い、プレゼントの封を開ける。

雅也、ハンドクリームを取り出す。

藍那、アイシャドウとコンディショナーを取り出す。

雅也「これ、ハンドクリーム？」

藍那「はい。うっちーさん、仕事柄、紙を持つでしょ。それにこの間のファミレスの時、手のかさつきが気になったんです。なので、手をちゃんとケアしてもらいたくて」

雅也「ありがとう」

藍那「これは、アイシャドウとコンディショ

ナーですか？」
雅也「うん。アイシャドウの色は、名刺と同じあずき色にした。藍那、この色好きだって名刺作るときに言ってたでしょ」
藍那「覚えてたんですね」
雅也「それから、そのコンディショナーは、今女性人気なんだって。専門学校の友達に相談したら、教えてくれたの」
藍那「確かにこれ、今注目のものなんです。大切に使います」
雅也「俺も、ハンドクリーム大事に使う」
微笑み合う雅也と藍那。

15　品川駅（数日後）
雅也が改札口を出てくる。
N「クリスマスから数日後、僕は映画やドラマの制作でお世話になった千葉の山岡プロデューサーから忘年会のお誘いを受け、二年ぶりに東京へやってきました」
雅也、ふと立ち止まって振り返る。

雅也「気のせいか……」

16　品川駅近くのビルの表

雅也が歩いてやってくる――山岡やその他俳優や監督たちが集まっている。

雅也「ご無沙汰してます」

山岡「木内さん、お久しぶりです」

雅也「あれ、コウタ！？」

その中に浩太がいる。

浩太「うっちー！」

雅也「やっぱりコウタだった。さっき、品川駅の近く歩いてた」

浩太「歩いてた」

雅也「めっちゃコウタにそっくりな人見かけてさ、まさかコウタがいるなんて思わなかったんだけど、やっぱコウタだったんだ」

浩太「ほら、前に山岡さんがプロデュースした作品に出させてもらったことがあっただろ。それで去年に続いて、忘年会のお誘いを受けて」

雅也「そっか。去年はさ、俺演劇祭の稽古で行けなかったでしょ。コウタだけ、確か午前の稽古だけ出て東京行ったもんね」

浩太「そうそうそう」

山岡「お二人は、地元の知り合いだったんでしたっけ？」

雅也「同じパフォーマンスグループのメンバーで一緒の舞台に立った仲間ですよ」

山岡「そういえば木内さん、地元で演劇やってましたもんね。ＳＮＳで見てましたよ」

雅也「まさかコウタまでもが、山岡さんにお世話になってるなんて思わなかったけどね」

17　レンタルスペース・一室

雅也、浩太、山岡たちがそれぞれお酒片手に盛り上がっている。

浩太「（酔っぱらって）うっちー、飲んでるかぁ」

雅也「今日は飲むよ、ずっと。コウタ、もう酔ってるの」

浩太「ちょっとな」
雅也「そういえば、コウタと飲むの初めてだよね。いつも俺、稽古の時は車だったから、打ち上げの時もお酒飲めなかったし」
浩太「ああ、確かに」
雅也「とみーは、元気にしてる？」
浩太「元気だよ、仕事も忙しいみたいだし」
雅也「そっか」
浩太「うっちーは、これからどうするんだ？もう『スリジェネ』はやらないんだろ」
雅也「それがね、年明けからまた活動再開することにしたの。アカデミーって形で、週一の習いごとみたいになるんだけどね」
浩太「変わったんだな、『スリジェネ』も」
雅也「うん」
浩太「俺たち、結成からの約一年半、本当に頑張ったよなぁ」
雅也「そうだね……。去年の夏、一緒に初舞台に立って、途中でとみーと一緒にコウタを運営に誘っちゃって、演劇祭の時は散々

みんなに迷惑かけて」
浩太「あったな、そんなこと」
雅也「俺的に楽しかったのは、今年の夏のバンドチーム組んだ時だよ。俺、マネージャーやったじゃん、みんなに頼まれて」
浩太「あれは、本当に感謝してるよ。うっちーに頼んで良かった」
雅也「コウタ……」

18　新宿駅周辺の街（翌早朝）
N「忘年会はカラオケやラーメン屋なども行ったりして、三次会まで続き、三次会が終わった頃には、もう翌朝を迎えていました」

19　新宿駅・地下鉄出口の前
雅也、浩太、山岡たちが集まっている。
山岡「皆さん、今日はお集まりいただき、ありがとうございました。二〇二〇年も、よろしくお願いします。では、解散ッ」
と、ぞろぞろと分散していく。

雅也「山岡さん、ありがとうございました」
山岡「こちらこそ。これから、名古屋に戻るんですか？」
雅也「はい。七時半出発の高速バスで」
山岡「また、よろしくお願いします」
雅也「こちらこそ」
浩太「うっちー」
雅也「……？」
浩太「頑張れよ」
雅也「コウタ……」
と、抱きしめ合う。
浩太「じゃあな」
雅也「うん、バイバイ」
山岡や浩太、地下鉄の階段を下りていく――いつまでも見送っている雅也。
N「怒涛の二〇一九年は、こうして終わりを迎え、数日後には、二〇二〇年という新たな一年を迎えることになるのでした」

つづく